

令和6年度の教育活動等に対する学校評価書

令和7年3月11日

学校法人富士学園 静岡県富士見中学校
学校法人富士学園 静岡県富士見高等学校

1. 本年度の重点目標（経営方針を達成するための具体的な目標や計画）

- (1) 学力向上のための取り組み
 - ア. 家庭学習の習慣の確立（30分未満を減少させる→「生活の記録」の活用）
 - イ. 朝の読書を始めとする読書の啓発活動（統一指導）
 - ウ. 「特進コース研修会」で、3年間の統一した指導、教員の授業力の向上について検討する
 - エ. 中学部を開校したことへのメリットについて、総括する
- (2) 進路実現支援のための取り組み
 - ア. 国公立大学合格者Ⅰ類20名・Ⅱ類10名・総合5名の35名を目指す
 - イ. 学力分析会、進路検討会のさらなる充実
 - ウ. 企業見学を充実させ、職業や職場への理解を深め、自分の目で応募先を選び取り組みを通して、就職内定率100%を継続する
 - エ. 進路校による出前授業だけでなく、大学での問題解決プログラムなどに生徒を積極的に参加させる
- (3) 心豊かで健やかな体の育成のための取り組み
 - ア. 欠席に対するコロナ禍からの意識改革に加え、丁寧な生徒支援で新たな不登校を生まない工夫をし、欠席の減少に努める
 - イ. スマートフォンやタブレットの適正な使用の徹底
 - ウ. 部活動の在り方の検討（部活動充実チームの設置）
 - エ. 従来の教育相談に加え、図書室での昼休み対応をすすめる
- (4) 地域連携・地域貢献・開かれた学校づくりのための取り組み
 - ア. コミュニティ研究会だけでなく、様々な場面で生徒が活躍できる場の組織的な設定をし、生徒会活動との連携を図る
 - イ. 吹奏楽部、箏曲部、音楽部など、地域行事に積極的に参加し繋がりを深める
- (5) 学校運営の円滑化・教員の資質向上のための取り組み
 - ア. 校務支援システム「BLEND」のさらなる活用（指導要録・調査書への拡大）
 - イ. 創立100周年記念事業のアウトラインの策定
- (6) 生徒募集のための取り組み
 - ア. 新しく生まれ変わる特進コースの魅力発進の強化
 - イ. 特進コースに特化した説明会の複数開催
 - ウ. 学校説明会・部活動見学会・体験入学等で、特進・総合コースの在学が中学生に直接アピールする機会を増加させる
 - エ. 「寺子屋フジミ」で、高校生が中学生に直接働きかける
 - オ. SNSを利用した広報活動の拡充でフォロワーを増加させる

2. 自己評価とそれに対する学校関係者評価

※ 評価は、A（十分に成果があった）、B（成果があった）、C（少し成果があった）、D（成果がなかった）で記載する。

評価対象	評価項目	重点目標とその意義 具体的な取り組み	自己評価		学校関係者評価委員会から	
			評価	学校としての反省と改善策	評価	意見
1 学力向上のための取り組み	(1) 各コースの趣旨に沿った教育課程を編成し、特色ある教育活動を工夫・実践する	ア. 家庭学習の習慣の確立 ・高2特進コースで年度当初は「生活の記録」を活用し、学級担任が状況を確認してきた。 イ. 朝読書を始めとする読書の啓発活動 ・教室への読書用の本棚の設置 ・朝読中の居眠り注意の声掛け実施 ・朝読を8時25分頃からおこなうようにする ウ. 「特進コース研修会」で、3年間の統一した指導、教員の授業力の向上について検討する ・カリキュラム等開発委員会、特進コース研修会でR5年度より協議・検討を重ね、従来のⅠ類・Ⅱ類の類型を改め、AクラスSクラスのしくみにして、R7入学生からスタートさせる。 ・若手教員、中堅教員等の授業研究を実施し、おもに同一教科の教員間で参観・助言等を実施する。 エ. 中学部を開校したことへのメリットについて、総括する ・多様化している保護者からの要望や訴えに対し、中学部内での情報共有、対応のすり合わせを綿密に実施する。 ・中高一貫推進室により、中学部開校の成果と課題を協議・まとめている	C	ア「生活の記録」の活用の習慣化は、特進コースではほぼ実施。総合コースでは途中で中断してしまった。（学級担任が毎日確認するやり方にかんがりの負担があるとの意見が強い） ア 総合コースでは、30分の家庭学習でもなかなか習慣化は難しい現状である。特進コースにおいては概ね30分以上はできている ア 家庭でどのような学習をやるのかについて具体的な提示を、継続しておこなうことが必要。 ア 生徒数の減少の中で学級の人数を少なくし、担任の確認の負担を軽減することも必要か。	A 2人 B 5人	- 家庭学習の習慣確立は、学習について「具体的な狙い」をもって、辛抱強く指導に当たることかと。また、生徒一人一人に評価や気分の高揚を促す場面に常に用意することが必要か。「やれやれ」との一方通行では改善はないかもしれない。永遠の課題であろうが、いかに「その気にさせる」ことができるかだ。 - 特進コースの改革については、中学や説明会を通じ周知はできているようだが、もっと一般にも大々的に発信・広報すべきではないか。内々だけで情報が止まっているような印象が強い。 「生活の記録」という生徒の生活の細かいところまでよく見えています。すぐに効果は期待せず、いずれ効果は出ることを確信しつつ、長い目で見ていきたい。 - 共通理解をし、それを行動に移せるか。時期を決め、みんなで、同一歩調でやれば改善される。 - 集中して読書できる貴重な時間です。新着図書・推せん図書を紹介して、情報発信を工夫していきたい。朝読書を通して、図書室の利用につながり、読書習慣が身につくと思われる。 - 毎日30分の家庭学習の習慣化が難しいのは残念である。読書も必要だが、せめて毎日1時間位、自主勉強するような指導が欲しい。 - 学級担任や教員が寄り添って取り組んでいることが良い結果に繋がっていると思う。 - 若手教員や中堅教員の授業研究を実施し、教員の授業力が向上することは、生徒たちの進学力に繋がると思う。 - 生活の記録、家庭学習の習慣にポイント制を考えたかどうか。今の子どもたちには競争が少なくなっているが、体育祭では大変盛り上がった。クラス単位等でポイント制にして、
	(2) ICT機器を効果的に活用し、分かる授業、やる気が起きる授業の展開に努めると共に、個に応じた学習指導の充実により学力向上を図る。		B	イ 朝読の時間において読書以外の活動をおこなっている生徒は減少している。ただ、読書以外の活動も認めたらどうかという考えの教員もあり、再度朝読書の意義と効果について共通理解を図り、教師が朝読を推進しようとしている姿を生徒に示せるようにしたい		
	(3) 各学年・教科毎に必要な家庭学習時間を設定し、学習と部活動の両立を基本においた教育活動の定着を図る。		B	ウ 現行の特進コースの指導の充実、三者（生徒・保護者・教職員）から高く評価されている。 ウ 特進コースの改革については、各説明会等や、教育広報部の情宣活動により中学校側に比較的理解されたとされる。 エ 公立中学校で確かな指導実績のある教員との中学部編成により、高校生に対する指導よりもより綿密・丁寧な指導が必要であることについて、多くの教員に意識の変革をもたらすことができたと考えられる。 エ 少人数であることで、一人一人の生徒に活躍の機会が複数あり、生徒の自己肯定感の高まりに貢献している。		

						それも生徒が評価する。学校全体でおもしろくやるのが大事では。 ・総合コースで学習の習慣化が難しいとの事だが、まずは入学時より進路を意識して生活することが必要では。アンケートからも生徒と保護者から危機感あまり感じない。推薦入試の条件など継続的な学習の必要性を、具体例を挙げて意識させるのも良いと思う。
2 進路実現のための取り組み	(1) 主体的に進路を選択する能力の育成、望ましい職業観・勤労観の形成等を図るため、3年間を通じた計画的なキャリア教育を実践する。 (2) 大学、企業等の情報収集を充実させ、生徒への情報提供を一層推進する。 (3) 就職については、内定率100%を目指す。 (4) 進学については、国公立大学、私立大学、専門学校など、第1志望への合格を目指す。 (5) 高大連携プログラムのさらなる活用。	ア. 国公立大学合格者Ⅰ類20名・Ⅱ類10名・総合5名の35名を目指す。 ・進学実績の高い他校の授業参観を有志の教員で実施したり、地域の代表として研究授業に取り組んだりして、授業改善を図る取り組みをおこなっている。 ・特命講師と教員との連携を密にして、生徒一人一人への学力向上のためのアプローチを充実させる取り組みが為されている。 イ. 学力分析会、進路検討会のさらなる充実 ・会の開催・運用は年度当初の計画通りにおこなわれている。 ウ. 企業見学を充実させ、職業や職場への理解を深め自分の目で応募先を選ぶ取り組みを通して、就職内定率100%の継続をする。 ・総合コース2年生で探究活動の時間を利用して、多くの職業のスペシャリストを招聘し、実演等を含む講話を実施した。 エ. 連携校による出前授業だけでなく、大学での問題解決プログラムなどに生徒を積極的に参加させる。 ・生徒はオープンキャンパスに積極的に参加できたが、問題解決プログラムを実施するといった大学からの案内は確認できず、探したが見つけることができなかった。	C C B B	ア・イ 人数目標を立てることは目標を具体的に把握する上で大変重要である。結果の検証は、2年次での生徒の実態も十分加味した上でおこなう必要がある。 ア 数値目標を掲げて取り組むことで、高3でなくても自分のときにはどうしたいという意気込みが生まれ、進路に対する早い段階からのモチベーションの高揚に結びつく。 イ 分析会等については年間計画の中で予定どおり運用されたが、学級担任がその必要性を今ひとつ理解していないケースが見られ、その会の目的や意義を全体で共通理解する必要があるように感じている。 C B B B	A 4人 B 2人 C 1人	・35名の根拠は？当校が求める理想の生徒像を教員と生徒が共有し、3年間の教育活動を通じ、充実感、達成感を得た中での数字となることを願いたい。 ・実現支援が教員から生徒へと一方通行になっていないか（押付け感）を危惧する。また、生徒の取り組み姿や様子を定期的に「見える化」できないものか。アカデミックの分野はとかく埋もれがちとなる。 ・分析会や検討会で探求し深まった内容や方向性を十分に活用出来ているか？アリバイ作りの場になってないかを常に検証する必要ありと考える。 ・1人1人の学力向上に向け、大学進学に向けて、日々、取り組んでいるが、アピールの方法を考えたい。 ・入学した時にはこれだけの成績の子がこの大学に受かりましたという、伸びしろを具体的に示したい。 ・国公立何人という数値目標だけでなく、学習習慣で30分以上の生徒が80%以上という目標も良いのでは。 ・今年度も就職率100%に安心。企業見学や職業スペシャリストの講和は、職業への理解を深めたと思う。なにより、指導の先生方が生徒に合ったアドバイスがあったからだと思う。働きがいのある仕事を見つけて、自覚を持った社会人になって欲しい。 ・国立大合格者数が毎年増えて、先生達の熱心な授業改善が見られる。就職率100%の継続は、素晴らしい。 ・国公立大学進学者が多くなることは学校としての宣伝にもなるので、この取り組みにより、更に多くの富士見高校への進学者増加を目指して頂きたい。 ・就職率100%を継続するため、今後も実演等を含む講演内容の充実を図って頂きたい。 ・大学との積極的な連携は必要。 ・昨今の物価高により子供に余りお金をかけられない家庭も増えているので、国公立大学合格者数でのアピールは魅力的。ただ、今後についてはそこにとどまらず、県内大学に加えて、東大、京大などのトップ大学や医学部などを受験する学生が毎年いると更にイメージが変わると思う。

3 心豊かで健やかな体の育成のための取り組み	(1) 部活動や学校行事を通して様々な人間関係を体験させることにより、思いやりや心、感謝の心、公共心などを育み、いじめを許さない環境づくりに努める。 (2) 服装やマナーの徹底を図るとともに、元気でさわやかな挨拶ができる生徒を育てる。 (3) 校内美化の意識を向上させ、清掃活動の徹底を図る。 (4) 法令遵守の精神を養うとともに、情報化社会に対応した倫理意識の高揚を図る。 (5) 生徒が主体的に取り組み、共に喜びと感動を味わうことができるような行事の充実を図る。 (6) 学校行事、生徒会活動等を通してリーダーの育成を図るとともに、先輩・後輩の絆の連携を深める。 (7) 安易に学校を休まない雰囲気づくりに努め、欠席の減少に努める。 (8) 学校不適応等の問題や悩みを抱えた生徒の早期発見を図り、その支援に努める。 (9) 研修等を通して、教育相談への理解を深め、校内支援体制の充実を図る。	ア. 欠席に対するコロナ禍からの意識改革に加え、丁寧な生徒支援で新たな不登校を生まない工夫をし、欠席の減少に努める。 ・学級担任はクラスの生徒の出欠席・遅刻・早退と理由について確実に把握し、その日のうちに家庭に連絡し、状況確認と登校等についての働きかけをいかに実施している。 ・校務運営委員会、職員会議等で、生徒の出欠席等の現状について報告があり、不登校等に陥らないよう、早めの対応ができるように、学級担任・学年主任を中心に働きかけを積極的におこなっている。 イ. スマートフォンやタブレットの適正な使用の徹底。 ・スマートフォンは登校時にすべて学校で預かり、下校時に返すようにしている。 ・タブレットは情報管理室が全端末を管理し、紛失等に対して対策を講じている。 ・タブレットのカメラ機能は制限している。 ウ. 部活動の在り方の検討(部活動充実チームの設置) ・本校に入学する生徒が望む部活動の在り方は、全国大会等きわめて高いレベルを目指し、厳しい指導を求める希望と、結果にはあまりこだわらずに、楽しんで取り組みたい希望が二極化する傾向が出てきている。部活動の在り方は、生徒募集にも大きく関係する事項であるため、今年度から望ましい部活動の方向性を探るチームを立ち上げ、取り組みを開始した。 ・最近の傾向の中で、教員の中でも部活動の顧問につくことについて、敬遠する傾向が見られるため、教員側にとっても指導しやすくなるような環境づくりに探っていく。 エ. 従来の教育相談に加え、図書室での昼休み対応をおこなう ・コロナ禍以降、生徒が生徒間での些細な人間関係のトラブル等を自分たちで解決していくことができない傾向が顕著に感じられるようになったため、SCに加え、昼休み等に図書室に相談担当の教員を配置している。 ・生徒や保護者からの悩みや要望等については、学級担任が電話で頻りに連絡を取るように対応したり、アンケート等を全校で実施したりして、それを生徒指導担当や相談担当、管理職等で共有し、迅速に、適切に対応するようにしている。	C ア 数年前に比べ、学級担任や学年主任等が家庭と電話連絡や対面で連絡を頻繁にとるようになり、欠席やトラブルの現状把握が早い段階でできるようになってきていることは確かである。ただ、生徒の中で、学校を休むことや遅刻することへのハードルはコロナ禍前と比較すると非常に低くなっているのは明らかである。 ア 生徒のコミュニケーション力、トラブル等を回避・解決する力の低下はかなり顕著であり、特に本校においては男子生徒間のトラブルが多い。またトラブルが発生すると、早い段階で保護者等が介入してくるため、生徒同士で解決させていく取り組みが不十分になってしまう事例が多くなっている。このことが、不登校の大きな一因となっており、また通信制の高校が一般的になってきているため、生徒が比較的安易に転学等を決めてしまうようになっている。本校だけの努力ではどうにもならない大きな問題だと考えている。 C イ 現在の高校生にとって、スマホは生活に欠かせないツールとなっている。ただ、校内で発生している生徒指導上の問題の大半が、スマホの不適切な利用に起因する問題である。ただ、そのような問題のスタートは学校の管理下から離れた場所で行われ、その解決が自分たちではできなくなり学校に持ち込まれている。スマホ利用については、その危険性の啓発も含め、毎年講演会等で呼びかけ、また機会があるごとに教員もよびかけているが、実際のところ問題発生率が減少しているようには、あまり感じられない。保護者を巻き込んだ対策も、大きな成果につながるのかも正直疑問である。本来はもっと社会全体で抜本的な取り組みが必要だと思われるが、とにかく学校でも根気強く啓発・指導を継続していく。 C ウ 中学校における部活動の在り方が大きく変わってきている中で、高校側も部活動に対する考え方・方針を、改めて多くの教職員で討議し、同一歩調は取れなくても、共通理解できるようにしていかなくてはならないと考える。そのために部活動指導にのめり込んでいる教員だけでなく、部活動に多様な考え方を持っている教員で、まずは協議し、その結果を全職員に上げていきたいと考え、部活動充実チームで取り組みを始めている。教員の働き方改革の面から、また生徒数が減少していく中での活動資金をどうまかなっていくのかまで、協議することは多岐に及ぶが、意欲を持って取り組んでいる。 エ 現在本校の職員の実態を見たときに、教員同士が談笑しているような場面はほぼ見られず、保護者等に電話連絡をしているとか、来校されている保護者との面談や相談に応じているとか、またはパソコンの画面で事務仕事に没頭もふらずに集中して取り組んでいるとかの姿が目につくばかりで、時には悲壮感すら漂っている。SC、図書室での相談活動は、意義のある取り組みで評価できるが、それだけではとても間に合わないほど、悩む生徒、戸惑い迷う保護者は増加している。今後ますますその傾向は大きくなっていくと思われるため、一人一人の教職員のだれもがカウンセリングマインドとその実践力の向上を図る必要を感じている。	A 2人 B 3人 C 2人 - 欠席に対する意識、スマホの利用など、これまでにない対応に迫られていることに憂いを感じる。時代折々に新たな問題が出てくる中、教員の取り組みで乗り切ってきたと思う。我慢強く指導を継続して欲しい。 - 指導と共に、補いを生徒自身も取り組む手立てはないのか? 一方通行にならず、生徒とともに相互作用を探ることも大事かと。生徒が寄与する姿を探ることが出来たら、新たな局面も出てくるかもしれない。 - 部活動は生徒にとり生命線。自己表現・自己実現の場であり、クラス活動と並ぶもう一つの世界で、欠かせないもの。検討の結果が良い方向に向くことを期待したい。 - 教員集団の職員室での悲壮感漂う状況は心配。どのような対応が検討されているか? 70~80名の先生が和気あいあい、楽しい100周年になるような意気込みでいて欲しい。 - 不登校、欠席、部活動、スマホについても、日々対応しているご努力に感心する。 - 不登校・欠席・スマホ利用・生徒間トラブル、全て大変な問題。不安や悩み事は早期に相談・対応をして、学校全体で解決のきっかけを見つけない。今年度、昼休みの図書室での相談活動が始まり、その活動と先生方の思いは生徒に伝わり、きっと良い方向につながると思う。 - 欠席生徒の家庭に電話を入れる事で、トラブルを早く見つけ、不登校生徒が通信制の高校に転校するのを防いでいる。また、図書室への相談担当の配置は大変良いと思う。 - 生徒も減り、使われない教室の有効利用を考えたかどうか。ダンスが話題になっているが、余った教室を利用して、子供たちに興味があることに使えないか。 - 心と体の問題は、生徒が楽しく通学することにおいても肝心な部分だと思う。 - スマホやタブレットの適正な使用に合わせて、SNS等の使い方の指導も必要と思う。(特に1年生) - 部活動の在り方については、試合等の結果はもちろん高いほうが良いが、今後も昭和時代の厳しい部活動ではなく、生徒が楽しく活動でき、更に高みを目指す方向で指導を頂きたいと思う。 - スマホについては学校だけで解決できる問題ではなく家庭との協力が必要だと感じるが、アンケートを見ると家庭より学校の方が危機感を持っていると感じる。部活、学習面で忙しい中、先生方は本当に大変そう。時間に限りがある中で、また部活に対する意識の両極化が進む中では、部活の外部委託も仕方ないと感じる。
-------------------------------	--	--	---	---

4 地域連携・地域貢献・開かれた学校づくりのための取り組み	(1) 保護者や保護者会役員との連携を密にするとともに、保護者会の活動を充実させる。 (2) 学校関係者評価委員会、評議委員会、理事会等の意見を踏まえ、教育活動の改善と充実を図る。 (3) コミュニティ研究会を基軸に地域行事に積極的に参加するとともに、地域貢献などを通して、地域との共生を深める。	ア. コミュニティ研究会だけでなく、様々な場面で生徒が活躍できる場の組織的な設定をし、生徒会活動との連携を図る。 ・コミュニティ研究会の存在は大変大きく、当会が果たしてくれている役割は極めて大きいものである。ただ、その担当している顧問教師の時間的負担や、責任は重く、このような活動を長続きさせていくためには、同じような活動を志す仲間を増やすことが不可欠である。その面で、校内の活動、言い換えれば富士見祭の企画・運営が主だった生徒会本部が、外部に目を向け、活動の幅を広げていくことは大変大きな意義があると考ええる。 イ. 吹奏楽部、等曲部、音楽部など、地域行事に積極的に参加し繋がりを深める ・本校の音楽活動関係の部活動に対しては、以前より多くの出演依頼を、多方面から頂いており、今年度はさらにそれが多方面からの依頼に増加している。小学校や中学校からの依頼だけでなく、ショッピングモールや地域の企業、自治会、商店街等、生徒の活躍の場はひろがっている。	B ア 今年度コミュニティ研究会は、清掃活動や祭典等への協力活動、富士駅北口の活性化・まちづくり活動などに加え、学校新聞の活動（全国レベルで評価されている）、高校生模擬裁判活動、サイダー羹とお茶をコラボさせた新商品（茶イダー羹）の開発、インバウンドを取り込む新たなプロジェクトの提案等（静岡銀行に評価され実現化に向けて模索中）、テレビの特番や新聞等でも紹介されるような創造性豊かな活動に、活動の幅を広げている。 ア 生徒会本部を中心とした組織的な活動には、まだつながってはいないが、学年部への働きかけや、運動部の協力なども見られるようになってきていることは評価できる。 今後は特別活動部が活動のコーディネートをし、組織としての動きができるようになることを目指したい。 イ 音楽関係の部活動は、地域連携・地域貢献の役割を十分担っていると思われる。それ以外の活動では、たとえばバントワリング部の地元の祭典への参加、富士市がおこなっている高校生議会への、本校生徒有志の参加など、生徒が学校外で活躍できるようになってきている。	A 7人 - 生徒の力を周囲が認めることから生まれもの。おおいに伸ばし、ほかの分野でも活かしてほしい。「人に技量を見てもらえる。」そして、「評価を受ける。」という作用には、モチベーションを上げる効果がある。生徒が生き生きとするする原点かと考える。当校の特色の一端を担う力だと考えるし、もつともっと伸ばしたいものである。 - 地域行事に積極的に参加されているように見えた。また、挨拶が良くできていると思う。 - コミュニティ研究会だけでなく、生徒会等の活動内容を理解してくれる仲間を増やすことで幅が広がると思う。地域と学校が連携することで新しい人と人との交流が生まれる。これからも地域から期待が寄せられる富士見高校であって欲しい。 - コミュニティ研究会の活動は、テレビ・新聞等で紹介され、卒業生として大変誇りに思う。また、吹奏楽等の音楽活動が広がり、地域貢献の役割を十分担っている。 - 今後も学校・地域・家庭(保護者)が三位一体となり、学校づくりを進めて頂きたい。 - 市内の小学校・中学校からの依頼だけでなく、他企業や自治会、商店街など、生徒の活躍する場所を増やして、今後も地域との共生を深めることは大事なことだと思う。 - 顧問がいなければ、例えば、ダンスをやっている人に週1〜2回、地域の仲間としてやるのはどうか。 - 吹奏楽やコミュニティ研究会等が地域と係わっている事例はとても良いと感じる。文化祭等で富士見を知ってもらう機会は少なくなっているの、地域のイベントやお祭り等にこちらから参加していくことでマスコミに取り上げられる場合もあり、幅広い年齢にアピールできる可能性もある。
5 学校運営の円滑化・教員の資質向上のための取り組み	(1) 学校運営の円滑化を目指し、会議日を月曜日に設定できるように、教育課程の改善に取り組む。 (2) 学年・学級経営の工夫・改善に努め、職員の連携を一層密にし、組織力の向上を図る。 (3) 業務のICT化を促進し、校務の効率化を図るとともに報告・連絡・相談を徹底させる。 (4) 学年便り、BLEND等を活用して保護者との連携を図る。 (5) 同窓会や保護者会との連携を深め、創立100周年記念事業の準備を進める。 (6) 教職員のICT活用能力を高め、授業力の向上に積極的に取り組む。 (7) キャリアステージに応じた計画的な研修を実施し、教職員の資質向上に努める。 (8) 外部講師を招いての校内研修、校外における研修会等への積極的な参加を促し、職員研修の充実を図る。 (9) 服務規律の徹底を図るとともに、働きやすい職場環境づくりに努める。	ア. 校務支援システム「BLEND」のさらなる活用 ・BLENDは、学校から保護者や生徒との連絡方法、教員との緊急の連絡方法、出欠・遅刻、欠課等の管理をはじめ、大変活用率は高い。今年度、新たな分野での活用の取り組みはなかったが、教職員内での利用については、活用が定着している。 イ. 創立100周年記念事業のアウトラインの策定 ・創立100周年記念プロジェクトチームを立ち上げ、定期的、また不定期にもメンバーが集まり、会議を重ねてきている。	B ア BLENDにより、非常に多くの業務が効率的に進められている。教職員の利用についても、特に抵抗なく進められている。 ただ、校内でブレンドの担当となる教員は、BLENDで管理している業務を取りまとめたり、業者との窓口になったりと、非常に責任は重く、業務が集まる傾向がある。いわゆる情報処理関係の業務全般に言えることであるが、パソコン等により多くの教職員は負担が軽減されるが、その業務の担当者は、まだ限られたそういう方面に堪能な教職員に業務が集ましがちになり、その結果、責任・負担が極めて重くなることを感じている。 C イ 多額の予算を費やして行う一大事業であるため、プロジェクトチームに所属する各員は、いろいろな思いを持ち真剣に討議を重ねてきている。 ただ、このプロジェクトを全職員で盛り上げ、成功させていこうという機運までには、まだ実際の事業開始まで間があることもあって、現時点では高まっていない。 式典等のイベントや校舎改築等施設整備等も確かに重要ではあるが、それよりもさらに大切だと思うことは、この大きな節目に、生徒の意識やあらわれがより良いものに改善していくことである。 生徒が、「建学の精神」に込められた思いを意識し、地域社会から評価されるような姿になっていくことこそが、100周年で達成したいことであると思われる。	A 3人 B 4人 - 業務遂行にあたり、機能的かつ効率的なシステム導入が効果を上げていることは好ましい。その管理に当たり、管理業務がチームとしての取り組みであることを願う。 - 仰る通りで、100周年に向けて、再度、全職員で当校の「目指すところ」を確認するとともに、それを生徒といかに共有し、進むかが大切となろう。これまでの100年から、当校が次のステージに上るためにも逃さない機会だと考える。 - 支援システムの活用が重要視される中、専門性が求められることへの対応を早期に実現されるよう努めて頂きたい。 - 令和9年には創立100年という歴史を刻んできた節目を迎える。富士見高校のよき伝統を踏まえつつ、特色ある学校づくりに向け新しい伝統も加えて更なる発展を望む。 - 校務支援システム BLEND を更に使用して、情報の共有をスムーズにして頂きたい。 - 創立100周年記念プロジェクト事業のアウトラインを策定し、プロジェクトチームを立上げて会議を重ねるなど、100周年を盛り上げるためのチームワークが必要。 - BLENDは保護者の立場でも欠席連絡など便利。先生方の業務が効率化されるのはとても良い。更に出欠だけでなく、小テスト等の成績も反映されたら、より活用できそう。

6 生徒募集のための取り組み	(1) 広報活動を充実させ、保護者、地域、中学校、学習塾との協力体制を確立する。 (2) 生徒受け入れのための環境の充実を図り、明るく楽しい学校づくりに努める。 (3) 学校説明会をさらに充実させるとともに、本校の魅力のPRに職員一丸となって取り組む。 (4) マス・メディアによる広報の開拓を図るとともに、ホームページの更新をきめ細やかに行い、常に新しい情報発信に努める。	ア. 新しく生まれ変わる特進コースの魅力発達の強化 イ. 特進コースに特化した説明会の複数開催 ・特進コースの改革については、昨年度より特進コース研修会及びカリキュラム等開発委員会の中で検討を重ね、内容についてかためてきた。それらの経過、また決定した内容については、年度始めの中学校訪問や、中学校で開催された高校説明会等、本校で開催した見学会、体験会、相談会等、さらに私学の合同説明会等の折に説明してきた。特に今年度は特進コースに特化した説明会も2回開催した。 ウ. 学校説明会・部活動見学会・体験入学等で、特進・総合コースの在学が中学生に直接アピールする機会を増加させる エ. 「寺小屋フジミ」で、高校生が中学生に直接働きかける ・今年度は、本校生徒が中学生に説明する、またはアピールする機会として、以前から行っている本校の体験入学の折の生徒からの説明に加え、「寺小屋フジミ」というイベントを立ち上げ、まさに生徒が主体となって、本校の昨年度の入学検査についての解説や、中学生のお悩み相談での対応等を実施した。 オ. SNS を利用した広報活動の拡充でフォロワーを増加させる ・本校では BLEND は学校と現在籍生徒・その保護者への情報発信に、ホームページは、学校の公式な情報をすべての人が閲覧できる情報源として、Facebook、Instagram、X (旧ツイッター) は外部向けにリアルタイムで情報を発信する媒体として、さらに LINE はチラシと連動して、友だち登録をしてくれた方への情報源として活用している。	C アイウェアについて ・来年度から大きく変わる特進コースのカリキュラムや中学生の選択方法の改革については、今年の生徒募集における最大の目玉と考え、伝える内容の精選、伝える機会の増加、効果的な伝え方等に気を配り、教育広報部を中心に、全力をあげて取り組んできた。開催してきたそれぞれのイベント等に参加してくれた中学生の反応は概ね良好で有り、それなりの成果を期待していた。しかし、最終的な募集結果を見ると、昨年度以上に不調であり、大変悔しく感じている。この地域における中学生総数の減少は、もちろん大きな理由ではあるが、けっしてそれだけではない様々な理由があることは考えられる。 来年度の生徒募集においても、今年度実施したイベントは継続して実施していく方針ではあるが、その開催方法や中学生・保護者に周知していたくための方策、本校生徒のイベントにおける活用方法等については、さらなる工夫が必要であることは明らかである。 C ・本校に子弟を通わせてくれている保護者の方、卒業生の保護者の方は、本校の教育活動への理解や評価を好意的にしてくださっている。また、イベント等に参加してくれた中学生は、その後リピーターになってくれたり、受検者になってくれたりすることも多い。しかし、地域においてはやはり、公立高校への志望が第1であり、また富士見高校よりも星陵高校の方が上、星陵高校に行けるのなら富士見高校よりも星陵高校を選ぶという実態は、大変悔しいことではあるが、根強く存在している。 B その認識を改め、「富士見に行きたい」「富士見が一番」という風潮を、どのように創りだしていけば良いのか、極めて大きな課題である。そのためには、経営者や管理職、生徒募集担当者だけではなく、全職員が一丸となって「魅力的な富士見中学校・高等学校の創造」に向けて意識改革を進めていく必要がある。 オ やみくもに情報を発信していた以前とくらべ、発信する学校側の担当者が、どのように情報を発信すれば良いのかのノウハウを、かなり理解できるようになってきた。Facebook、Instagram、X (旧ツイッター) は、発信の情報作成が比較的容易であるため、リアルタイムに、頻繁に情報を流すことができるが、ホームページの更新には、専門的な技術が必要であり、まだタイムラグが生じてしまっている。	A 1人 B 4人 C 2人 ・ 当校が未来に向け掲げ目指す理想が募集の原動力。結論的には「育てたい生徒像」となるだろうが、併せて、その背景には、当校の「育みたい教員像」があるだろうし、将来「作り上げたい学校像」となるかと。この理念を共有し、全職員で取り組むしかないかと。 ・ 少子化の影響もあり、生徒募集も大変かと思うが、魅力ある学校をアピールする事に努力を求める。 ・ 新しい取り組み、「寺小屋フジミ」に期待している。生徒が直接、中学生に対応していることが富士見を身近に感じてもらえる。相談も話やすく親しみやすいと思う。入学につながる可能性もあり継続して頂きたい。 ・ 少子化により、公立高校の定員割れの状態がこれからも続くと考えられる。説明会、体験入学、学習塾との協力体制の確立が必要。 ・ 市内各中学校での説明会の内容が好評という話を他保護者からよく聞く。説明会を聞いた生徒が体験入学等のイベントに参加してもらえるのはありがたい。 ・ 特進コースを前に出すのは良いと思うが、生徒募集としてどちらかに偏らない方が富士見の良さも伝わると思う。「寺小屋フジミ」は、年齢の近い生徒が説明するのので、生徒募集には良い方法だと思う。 ・ SNS を利用した広報活動の拡充で、フォロワーが増加することの宣伝効果は高いと思う。 ・ まずは、アンケートで通学の利便性が良しとして挙がっている点は、かなりの強み。 ・ 新しく生まれ変わる特進の魅力は実際に始まって未来と避けられた可能性もある。この点については、口コミ評価等も利用し、自然とアピール出来たらよい。あとは近隣私立を参考にして塾との連携も必要だと感じた。
評価委員その他意見	・ アカデミックと部活動は、当校教育活動の両輪。広報の点で、両者間のアンバランスが気になる。要は、アカデミックの分野の露出がほとんどない。話題が無い訳ではないと思う。例えば、大学連携やHAPについても、進捗の様子が伝わらない。その取り組みを随時発信すべきでは？ ・ 100周年を祝うにあたり、早急にコンセプトとその具体的なイメージを出したいもの。進捗するには、はっきりした理念や夢が必要だろう。 ・ 進学数や新入生数などの具体的な数字を挙げていただくと、現状がはつきり見えるかと。 ・ 教育実習生の記事があったが、卒業生が教員となり戻ってくることの重要性。生徒を育てる、教員を育てる、学校を育てる。ペースがここにある。 ・ 生徒会・部活動・富士見祭・コミュニティ活動は高校生にとって、情熱を注いだ思い出に残る活動で、意欲的に取り組んできた3年間。生徒をひと回りも二回りも大きく成長させた。様々な問題を生徒が自分たちで話し合っ、解決する機会が、これからもあると思う。 ・ アンケート結果の、施設整備の充実が改善点1位というのが気になった。改善すれば入学につながると思えず、本当の施設整備は安全面だと思う。 ・ 先生方も忙しい中、お疲れさまです。100周年に向けて、より良い学校になるよう、できることは協力させていただきます。			

今後に向けての学校の考え（学校関係者評価を受けて）

昨年度の評価委員会で、評価すべき内容が多過ぎて、尚且つ、評価のポイントが曖昧になるとのご指摘を受け、学校として取組みと自己評価のボリュームを削減したが、それでもまだ評価すべき項目が多く、評価委員として適切に評価を下しにくいのご指摘を受けた。

そこで、令和7年度については、全職員で意識して取組み、自己評価をしていく項目を更に絞り、年度初めら職員会議・校務運営委員会等の中で、それらについての共通理解を徹底し、年度途中でも振り返り、取組の修正がしやすいように変更する。その評価項目は、令和7年度教育事業の計画に重点目標として明記した。